

川崎市における児童にかかわる ボランティア活動の動向にかんする研究

平 戸 ルリ子

1. はじめに

今日、福祉、保健、医療をはじめとして、様々な分野でボランティアの活動の重要性が認識されている。しかし、活動の内容、役割、位置づけなどは非常に多様である。こうしたボランティア活動の多様性は、時代が何を要求しているかということと深くかかわっていると考えられる。

わが国におけるボランティア活動の変遷をみても、第二次大戦後の混乱の時期(昭和20年代)に、青年有志による自発的な、浮浪児や多発する非行少年への援助活動が始められ、さらに昭和30年代に入ると、施設の設定・入所を推進する施策とも関連して、組織的に、彼ら青年たち(大学生・勤労青年)による施設での諸活動がおこなわれてきた。それが、昭和37年を契機としてボランティアの問題が全国社会福祉事業大会の専門委員会にとりあげられると、それが刺激となり社会福祉協議会の機能として善意銀行の発足をみるようになる。これは、ボランティアの開発、訓練、受け入れ側の調整連絡をはかる目的を持っており、ボランティアの活動、及び参加者の幅を広げることとなった。また、全国的にボランティアビューロー、ボランティア・スクールなども設置され始め、昭和40年代からは、ボランティア活動が地域への広がりを見せ始めた。さらに、昭和50年代以降は厚生省が「社会奉仕活動育成事業」の一環として、全国の市町村レベルにまで国庫助成をするようになり、各地域の社会福祉協議会を通じた活動がますます活発化した。また、在宅の福祉サービスの推進との関係で、ボランティアが地域でのサービスの担い手として期待され始めた。昭和60年代ころから

は、福祉ボランティアの町づくり事業(ボラントピア事業)の開始などでもわかるように全国的な動きとしての町づくり運動等の市民運動における、意識面での積極的な担い手として、ボランティアが考えられるようになってきた。

このように、歴史的な変遷をみても、ボランティア活動が、施設における活動から、広く地域社会における活動へと変化してきたことが理解できる。また、ボランティアの役割やそれに対する期待も変化してきたことがあわせて考えられるのである。

こうした点をふまえ、本研究では、対象地域を川崎市として、そこにおける児童にかかわるボランティア活動の動向を具体的なデータをもとにあきらかにすることとした。川崎市のボランティア活動については、昭和62年度に特に障害者、及び高齢者にかかわる活動について調査し、まとめたが、本稿ではその結果をふまえ、比較検討も加えながら、特に児童にかかわるボランティア活動の動向の特色を示す。

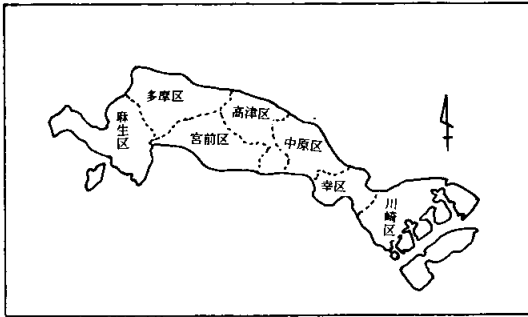
なお、本稿でいうボランティア活動とは、報酬、無報酬に関係なく、自発的な活動と広く位置づけた。

2. 対象と方法

(1) 対象地域

本研究の対象地域は川崎市である。川崎市の人口は109万人(昭和60年現在)。市の形は図1で示すとおり、7つの区が北から南につらなる形からなっている。戦前に建設された工場とそこに働く労働者の住宅、及び古くから発展した商店が密集する川崎区、幸区といった市南部と、近年、私鉄沿線の住宅開発により、急速に居住者が増加してきている麻生区、多摩区の市北部、

図1 川崎市全体図



およびその中間に位置する中原、高津、宮前区といったそれぞれの地域的な特色を示している。

また市のボランティア活動にたいする取りくみとしては、昭和39年より奉仕銀行を設置、さらに積極的に市としてコミュニティづくりをめざすことを方針としてうち出し、それにもとづき昭和57年に財団法人川崎ボランティアセンターを設置した。このセンターでは広報活動の他に、ボランティアの養成のための講座等も企画している。

(2) 対象及び方法

川崎ボランティアセンターに昭和61年3月現在把握されているボランティアグループ名簿の全数の中から、福祉、教育等に関係があると思われるボランティアグループ(171グループ)を選び、さらに児童にかかわる活動について特徴を把握した。グループ数は48グループである。さらに変化の要因については、ききとり調査を行い、検討を加えた。

川崎ボランティアの資料を用いたのは、市全域のボランティアグループをかなり詳細に把握しているからである。ボランティア名簿は、ボランティアセンターの職員が、ボランティアグループの活動の拠点と考えられる市内各施設の資料等から、できる限り収集したものであり、登録の形をとらず、実際に活動しているグループを掲載している。若干の数字の誤差はあると思われるが、これを基本とした。グループを対象としたのは、個人の分が不完全なためである。名簿上のグループ数は全体で約700であった。

なお、川崎ボランティアセンターの名簿では、障害児にかかわる活動は、障害者にかかわる活動の分類に入っていたが、本稿では、児童にかかわる活動の中にも含めることとした。

また、ボランティアセンターの名簿は、平成元年度版が改訂版として出されたため、最新の把握されうるグループ数は、61年3月現在のものからは変化している。しかし、本稿では、障害者にかかわる活動、高齢者にかかわる活動との比較も加えたいため、昭和61年3月現在のデータをもとにした。

3. 児童にかかわるボランティア活動の動向

(1) 入所施設を拠点とする活動

児童にかかわるボランティア活動のうち、入所の施設を拠点に活動を行っているグループは4グループであり、全体における割合はひじょうに小さい。(表1) 4グループとも市内の養護施設(S学園、K園)を拠点としている。活動内容は、主に、園内の清掃や衣服の補修の手伝い、入浴、運動会等のヘルプ等労力提供である。また、花見会、もちつき会等、レクリエーション活動を行っているグループもある(S学園、T会)。

開始時期は、昭和40年から45年にかけてが2グループ、51年から55年にかけてが2グループで、他の児童にかかわる活動と比べると比較的早い時期に活動を開始している。

(2) 地域活動

児童にかかわるボランティア活動で特徴的なことは、地域活動がひじょうにさかんなことである。特に障害児の地域訓練活動、及び生活をしていく上で、子を持つ親の視点から考えた内容のものが多し。良書を与えるという意味での私設図書館開設や、手づくりの絵本、玩具の作成、本の読み聞かせなどである。また、生活に密着した保育のボランティアも多い。

地域・拠点として把握されているところは、文庫・私設図書館が多摩・麻生・宮前区であり、また玩具作

表1 児童にかかわる活動

| | 現在のグループ数 | 地域・拠点 | 活動時間 |
|------------------|----------|---|--|
| 1 入所施設にかかわる活動 | 4グループ | S学園(養護施設) K園(養護施設) | 40年～45年に開始-2 51年～55年に開始-2 |
| 2 地域活動 | | | 36年～48年に開始-3 |
| ①文庫・私設図書館など | 16グループ | 多摩区、麻生区、宮前区に集中 | 51年～55年に開始-6 不明 -7 |
| ②影絵・人形劇、おもちゃ作成など | 11グループ | 川崎青少年会館 2 幸子ども文化センター 1 中原市民館 3 その他 5 | 51年～55年に開始-5 56年～ に開始-4 不明 -2 |
| ③保育ボランティア | 4グループ | 高津市民館 2 多摩市民館 2 | 56年～開始 -3 不明 -1 |
| ④公園での活動(一緒に遊ぶ) | 2グループ | Aホーム 1 その他 1 | 51年～53年に開始-2 |
| ⑤障害児の地域訓練活動 | 11グループ | 市内各子ども文化センターなど(市内5カ所) | 保育(地域訓練)48年～ 学童保育 52年～ 学齡児(O'B会)活動 55年～ |

(昭和61年3月現在)

成、人形劇等では半数が中原区となっており、市の中央部から北部にかけての地域が多い。また、保育のボランティアでも高津・多摩の市中央部が同様に拠点として上げられており、児童の健全育成にかかわる地域活動は、川崎市の中央部から北部にかけてさかんであることがわかる。

時期的変化をみると、障害児にかかわる地域活動が特徴的な動きを示している。この活動は、特に精神薄弱児の親の会が中心になって活動を開始しているが、施設への待機児を対象とした地域訓練の保育活動が昭和48年からおこっている。それが昭和52年ころになると学童保育に、さらに55年ころからはO'B会(就学した児童の公園等での遊びのつきそいや勉強の指導)へと活動が変化してきている。中心になっていた親の会の子どもの成長発達に伴ってニーズが変化し、それによってボランティアのかかわり、活動も展開されているのではないかと考えられる。

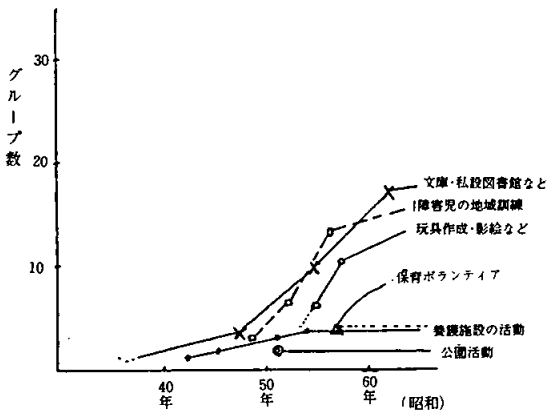
一方、健全育成にかかわる活動では、昭和50年以降

の活動開始のグループが中心となっている。これらのボランティア活動は、特に拠点・活動の地域であるところの地域開発とかかわっていると考えられている。住宅地の整備、発展がすすんだ時期と活発化がほぼ一致しているからである。また、保育ボランティアは、特に昭和50年代中ごろからおこっているが、これらは主婦の社会進出による保育の援助の必要性の高まりが背景にあるとも考えることができよう。

(3) ボランティアグループ数の変化

川崎ボランティアセンターの資料から、児童にかかわる活動についてのグループ数の変化を示すと図2のようになる。全国的にみると入所型(養護)施設における活動と、公園活動が横ばいであり、それに対し、文庫・私設図書館、障害児の地域訓練、玩具作成・影絵などの活動が増加しているのがわかる。これらの変化には、グループ及びボランティア個人、或は拠点とするところの施設側との関係など様々な要因が関係していると思われる。

図2 児童にかかわるボランティアグループ数の変化



次にボランティアグループの形成、活動の契機、広がり、衰退の要因について、資料と直接ききとりをした中からまとめてみることにする。

4 ボランティア活動の形成と広がり

(1) 活動の形成の契機

児童にかかわるボランティア活動を行うグループの形成の直接の契機としては、大別して3つの形があった。1つは、職場の労働組合の活動の一環として、或は所属する宗教団体の活動の一環として開始したというものであり、入所施設での活動を行う4グループがこれにあたる。2つ目は、障害児の地域訓練活動に代表される父母による自主的な活動の組織化とそれへの参加である。そして3つ目は日頃から自分の子どもを育てる上で、こうあればよいという要求が、社協やボランティアセンター、施設などの働きかけ、或は子ども文化センター等の施設の提供がきっかけで実現したというものである。児童にかかわるボランティアグループをみた時、特にこの契機が顕著である。文庫や保育ボランティアはこれにあたる。保育ボランティアのTグループの場合は、市民館での保育ボランティア講座がもととなり、「家事、育児に拘束されている婦人達の社会教育を受ける機会を広げると同時に、幼児教

育にかんする知識を深めたい」(ボランティアM氏)という理由で始められていた。またT文庫の場合は、市の読みきかせ講座がきっかけであり、H文庫は子ども文化センターの直接の募集がきっかけで結成されている。

(2) グループ数の変化の要因

増加したグループは文庫、私設図書館、玩具作成・影絵、障害児の地域訓練である。まず、文庫、私設図書館の増加の要因は住宅地の開発との関係があげられる。「新しい団地ができたが、図書館がないので絵本をみせあうことから始めた」(多摩区、D文庫ボランティア)、「地域で子どもが本を読む機会をつくってあげたい。」(麻生区、Y図書館ボランティア)等の理由で開始した活動が、前述したように子ども文化センターといった拠点を得たこと、或は社協やボランティアセンターの講習会、広報活動などによって増加していった。また、「高津区は転勤族の多い土地柄で、一緒に活動している仲間が抜けていくが、すぐまた新しいメンバーが入ってくれる。やはりお話し大好き、子ども大好きという共通の糸で結ばれているからか、とてもなごやかに活動が続けられている。」(高津区、読みきかせボランティアM氏)というように、参加者が途切れない理由を、共通の関心とグループの雰囲気にあるとする声もあった。

障害児の地域訓練にかかわる活動では、「設立当初は統合保育、ノーマリゼーションの運動の高まりもあり、さかんになっていった。もともと父母が保育活動をしていたので、労力提供的なボランティアは必要でなかった」(H父母の会、職員I氏)、「障害児の生活は、学校と家を中心。従って地域とのつながりはなくなっていく。その点で地域訓練会のように親と子が通うところがあることは大切。」(H父母の会M氏)という声があり、積極的に地域との交流を深める意味で、ボランティアを受け入れていったことがわかる。

一方、グループ数が横ばいのものには、入所施設での活動(53年より変化なし)、公園活動などがある。

そのうち公園活動は川崎市南部の川崎区の地域福祉施設を拠点に行われているものである。活動をしているボランティアは、「活動自体の面白さ、地域活動で子どもを通して、地域問題に触れていけることも大きな魅力。」(Aホーム Eグループ W氏)、「地域活動のやり方、つくり方を考えたり、子どもの問題以上に親の問題について考えるようになった」(Aホーム、K氏)と活動の長所を述べるとともに、問題として登録者や毎回の活動の参加者が減少傾向にあることを指摘していた。その理由としては、「学校を卒業すると減っていく。やめるメンバーは新しい人をつれてこない。」(Aホーム Eグループ W氏)、「活動のあと、反省会もそこそこにアルバイトにでかけてしまうなど学生の雰囲気は違ってきた。また、塾がよいや室内でのテレビゲームに熱中するなどで、ホームにくる児童が減った」(Aホーム、M氏)などであった。

さらに、川崎区(特に田島地区)の児童人口は、全市のみにても急速に減少化がすすんでおり(表2参照)、そういった対象児童の減少も実質的な活動の減少に影響を与えていると考えられる。こういう点では、市北部と市南部では、ボランティア活動の変化は対照的であるといえる。

表2 全人口に占める児童人口の推移
0~17才の人口 ×100) %
各地区総人口

| 昭和 地区 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 |
|----------|------|------|------|------|------|
| 田島支所管内 | 25.7 | 25.3 | 24.8 | 24.3 | 23.9 |
| 川崎区 | 25.6 | 25.2 | 24.7 | 24.4 | 23.9 |
| 幸区 | 27.1 | 27.0 | 26.7 | 26.4 | 26.0 |
| 中原区 | 24.7 | 24.5 | 24.3 | 24.0 | 23.5 |
| 高津区 | 31.1 | 31.1 | 30.9 | 30.6 | 30.1 |
| 多摩区 | 29.4 | 29.3 | 29.1 | 28.8 | 28.3 |
| 川崎市 | 27.8 | 27.7 | 27.5 | 27.2 | 26.8 |

(『町のようすと生活』神奈川県川崎愛泉ホーム、1982年)

5 まとめ

川崎ボランティアセンターの名簿をもとに把握した児童にかかわるボランティア活動の動向の特徴は以下のようになった。

(1) 入所型施設にかかわる活動は、全体の48グループの中で4グループと少なく、その活動が横ばいである。それに対して地域活動、特に昭和50年以降に集中して開始した文庫、私設図書館や玩具作成等の活動は急速に増加している。

(2) 地域的な特徴としては、特に市北部における親による児童の健全育成にかかわる活動の伸びが明らかである。一方、市南部の公園活動は横ばい(実質的な伸び悩み)の傾向にある。

このような変化の要因としては、主に市北部の近年の住宅地の開発と、それに伴い新しく居住者となった市民の児童育成に関するニーズの高まり、さらにそういったニーズに対しての市や社協、ボランティアセンターからの積極的な働きかけが考えられた。それにより、文庫や私設図書館活動、影絵、玩具づくり活動などといった新しく、日常の子どもの生活に密着した活動がさかんになったと言える。

以上のような川崎市における児童にかかわるボランティア活動の動向を障害者、高齢者にかかわる活動と比較してみると(表3、表4参照)、その変化の速さは異なるが、児童、障害者、高齢者にかかわる活動と、いずれも入所型施設を拠点とした労力提供型の活動から、地域におけるふれあいのある活動へと近年移行していることが把握できた。こういった意味では、ボランティアがコミュニティづくりの担い手としてかわりつつあると位置づけることもできるのではないだろうか。

一方、児童にかかわる活動の特徴的なことは、特に地域的な違いであり、前述したとおり、市中部から北部にかけて、昭和50年前後から著しく増加した児童の健全育成にかかわる活動と、市南部の公園活動との対

比である。こういった地域の差は、障害者、高齢者に 活動の特筆すべき傾向であったと言える。

かかわる活動では、あまりみられず、児童にかかわる

(ひらと りりこ：本学助手)

表3 障害者にかかわる活動

| | グループ数 | 地域・拠点 | 活動時間 |
|-----------------------|---------------------|--|--------------------------------|
| 1 入所施設にかかわる活動 | 7グループ | ・ K学園(精神薄弱者) ・ Iセンター (精神障害者) ・ A学園(精神薄弱者) ・ 病院など | 40年ごろから、50年前半にかけて活動盛ん。その後増加なし。 |
| 2 作業所にかかわる活動 | 20グループ | 川崎区 4グループ 幸区 3グループ 中原区 3グループ 高津区 6グループ 宮前区 3グループ 多摩区 1グループ (麻生区 0) | 56年以降に集中 |
| 3 地域活動 ①セツルメント活動 | 1グループ (ただし現在は消滅) | Aホーム(隣保館) | 35年から55年にかけて活動 |
| ②「福祉の広場」によって形成されたグループ | 4グループ | 全市的に障害者との交流を行う | 53年～ (福祉の広場) |
| 4 点字、手話 ①点字、朗読奉仕 | 6グループ | 盲人図書館 | 39年から |
| ②手話 | 30グループ前後 | 各市民館、教会など | 49年5グループでスタート 57年にブーム的になる |

(昭和61年3月現在)

表4 高齢者にかかわる活動

| | グループ数 | 地域・拠点 | 活動開始時期 | 内 容 |
|-----------------|--------|---------------------------|--|------------------------|
| 1 入所型施設にかかわる活動 | 49グループ | Wホーム (特養・養護) 33グループ | ～45年(3) 46年～50年(8) 51年～55年(13) 56年～ (6) 不明 (3) | 労力提供中心 (清掃、おむつたため等) |
| | | T園 (特養) 2グループ | 56年～ (2) | 同上 |
| | | S園 (特養) 4グループ | ～51年(1) 53年～ (1) 不明 (2) | 歌、踊りの指導、慰問中心 |
| | | K園 (養護) 10グループ | 40年～45年(1) 不明 (9) | 慰問、金品の寄託 |
| 2 地域活動 | | | | |
| ①障害老人とのふれあい | 1グループ | Aホーム | 57年～ | 体操 |
| ②ひとりぐらし老人とのふれあい | 1グループ | Aホーム | 50年～ | 家庭訪問 弁当の宅配 |
| ③給食サービス | 2グループ | 老人いこいの家 | 58年～ (1) 不明 (1) | |
| ④その他 | 5グループ | 全市的な活動 N奉仕団 | 20年～30年(2) 50年～55年(2) | 慰問 おむつたため |
| | | 全市的な活動 ヘルスボランティア | 56年～ (1) | 老人病の予防活動 |

(昭和61年3月現在)

※活動開始時期の()の中の数字は活動グループ数。

(註)

- 1) 吉沢英子「ボランティア活動の理念」、「福祉名鑑」1971年、富士新報福祉事業団
- 2) 小沢温、平戸ルリ子他「障害者にかかわるボランティア活動の動向と変化の要因に関する研究」、「障害者問題研究」1989年、全国障害者問題研究会